

A Study on the "Bujutsu-hayamanabi"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/39077

『武術早學』に関する研究

大久保英哲・朴貴順*

A Study on the “Bujutsu-hayamanabi”

Okubo Hideaki and Park Cindy

はじめに

日本では江戸時代以降、さまざまな武芸書が刊行されたが、單一種の兵法や武芸書がほとんどである。その中で総合武芸書と言えるのは2書である。そのひとつは『兵法秘傳書』(元禄14、1701)である。著者は山本勘助とされ、武芸のほか兵法に関する内容が取り上げられ、綿谷(1967)によって、中国武芸の影響が見られることが指摘されている。国会図書館にも所蔵され、翻刻版も刊行されている。

一方「無窮會」所蔵になる『武術早學』(宝曆7、1757)はやはり山本勘助著とされ、剣法・鎗法・弓法・拳法・棍法など5種の武芸が取り上げられている。朴(2006、2007)によって、これら的内容、特に拳法と棍法に中国武芸の影響が見られることが報告された。以来日本の武道史研究の精緻化ないし16世紀以後の中国武芸との交流史、さらには江戸期出版史研究の上でもこの『武術早學』は注目されている。

本稿では、この『武術早學』を翻刻し、研究史料としてその全体を提示するとともに、その内容の特色及び意義を明らかにする。

1. 『武術早學』の構成と翻刻

『武術早學』は、全50頁からなり、68幅の図、134勢の武芸動作を含んでいる。第一巻「序文」、第二巻「目録」、第三巻「軍法兵法記劔術之巻」(「劔法」「槍法」「弓法」「拳法」「棍法」)、第四巻「軍法兵法記奥義巻」の全4巻、24項目で構成されている。『武術早學』には【図1】の

ように著者「山本勘助」と「天文15年」(1546)が記されている。

なお、翻刻に当たっては縦書きを横書きにし、句点を打った。また図中の文言は「図」の下に列挙した。ルビは原文のままである。

1) 「序文」

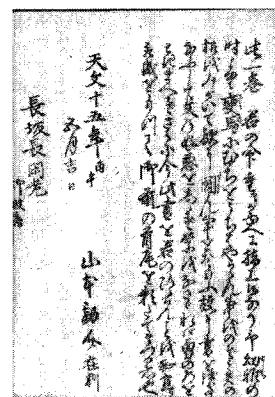


図1. 『武術早學』の「序文」の原文

此一巻 君の命重キがゆへに指上候なり、予幼稚の時より庚馬にむちをうちはやからん事をのぞミ矢の根をみがいて敵に闘ん事をおもふ、故に書を読事なふして文の好惡をしらず、学をなさざれば勇の道をわきまへず、さらに此書を君のひらかんことを恵宜ク取成をもつて御前の首尾を頼たてまつる者也

天文十五年 丙午 五月吉日 山本勘助 在刊
長坂長閑老 御披露

2) 「目録」

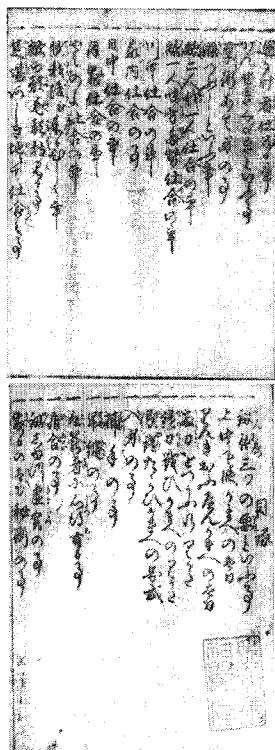


図2.『武術早學』の「目録」の原文

- 一、劍術三ツの要といふ事
- 一、上段下段構の事
- 一、りんきおうへんの太刀
- 一、両刀を遣ふ利かた
- 一、鎗刀戦ひ構ひのりかた
- 一、弓鎗戦ひの圖式
- 一、入身の事
- 一、捕手の事
- 一、取籠者に心得有る事
- 一、早縄の事
- 一、居合の事
- 一、剣しゆつ虚実の事
- 一、夜るの太刀秘術の事
- 一、追かけ者仕留る事
- 一、がんぜきくだきの事
- 一、柔術あて身の事
- 一、眼つぶしの事

- 一、敵二人我一人仕合の事
- 一、敵一人味方多勢仕合の事
- 一、川中仕合の事
- 一、家内仕合の事
- 一、日中仕合の事
- 一、月夜仕合の事
- 一、やミのよ仕合の事
- 一、敵我後来るひらく事
- 一、敵の顔色顔持見る事
- 一、足場あしき地ニテ仕合の事

3) 「軍法兵法記劍術之巻」

ぐんほうひやうほうきけんじゅつ まき
軍法兵法記劍術之巻

甲州住人 山本勘助著

(1) 剣法

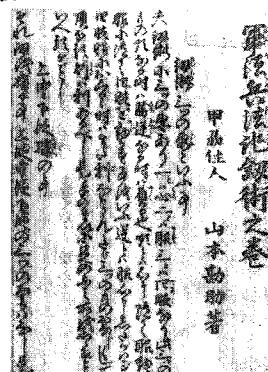


図3-1-1.『武術早學』の「劍術三ツの要といふ事」の原文

・ 剣術三ツの要といふ事

夫劍術に三ツの要あり一ニハ心二ニハ眼
三ニハ四肢なり、此三ツのもの順なる時ハ勝、
逆なる時は負る也、順とハ心に隨て眼動キ眼
に隨て四肢を動かす事をいふ、逆とハ眼心にし
たがハズ、四肢眼におくるゝ時ハまた利なから
ん、たゞで三ツのものおなじくして順なる則ハ
利あるべし、是手のまいに足のふミ所をしらず
といへる がごとし

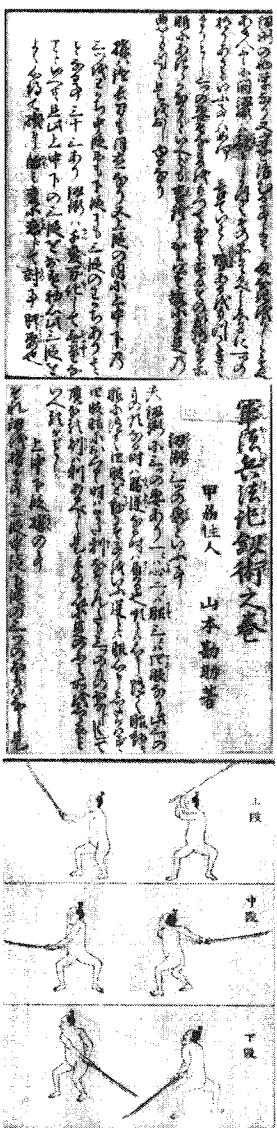


図 3-1-2. 『武術早學』の「上段下段構の事」の原文と動作

• 上中下段構の事

それ剣を構る事、上段中段下段の三つのほかなし、是剣術の初学なり、又身を治むる事よこしまなきをよしとする也、ある人予に問、剣術ハ敵によつてその品かわるべしかるに一つの極りありといふ

事ハ如何、答ていわく 勢 あるをもつてきわりとし、三つの要そなわるをもつて至るとする、その至極する所眼にあきらかなりといへども言語におよばず故に手足の曲をもつて是をおしゆるなり構ハ鎧長刀も同意なり、又上段の内に上中下の三つをわかつち中段にも下段にも三段のわかつちあり、其ことなる事三十三あり、剣術ハ千変万化して無量なりといへ共、且此上中下の三段を出ず、初心此三段をよく心得て機に臨ミ変に応じて討事肝要也

- 上段
- 中段
- 下段



図 3-1-3. 『武術早學』の剣法の原文

• 上段 電光の位 (浮足)

此かまへ入引の位これありされバ足をからく、太刀に電光の習ひあり

• 上段 寒夜闇霜の位 (沉足)

此かまへに眼付のならひあり敵の表裏におどろかず 足をふみすえ心をしづめて位をとるべし

・ 上段 寒夜闇霜の位（浮足）

此かまへハ足をからく心をしづめて位をと
る習ひありされば太刀をしづかに足浮葉の
ならひこれあり

・ 中段 一葉浮水の位（浮足）

此かまへ浮水の習これあり 足に薄水を
ふむこゝろあり

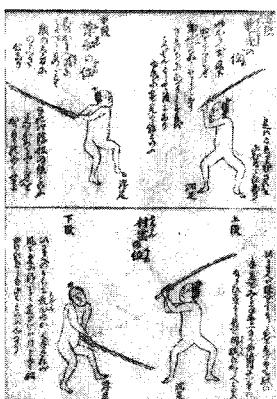


図3-1-4.『武術早學』の劍法の原文

・ 上段 電光の位（沉足）

此かまへ前後に 心をめぐらし身 舞蝶の如く
せよとなり されば前にあるかとすれば こ
つぜんとして後にあり ゆえに電光の位とい
ふ 足ハこれりむさいを ふむならひあり

・ 中段 浮船の位（浮足）

此かまへ波に うかべるものゝごとく 敵の太
刀に のるべき心あり されば浮船の位とい
ふ 足をからくふみ身を かうもりの如くせよ

・ 上段 村雲の位（沉足）

此かまへハ眼をすまし心をしづめて敵の手立
を見る事専一なり、必此内に一重のならひ有
之 是を閑眠のおしへといふ

・ 下段（浮足）

らんしん
此かまへのうちに乱心のおしへ有、されば
風に雲の行ごとく 雲ゆけば月もゆく船 ゆけ
ばきしもゆくといふ心なり

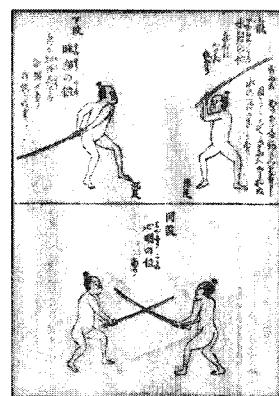


図3-1-5.『武術早學』の劍法の原文

・ 上段 水月の位（浮足）

この心得かたき位なり歌に云、ありなしを何
といはまし 月にミえて手にハしられぬ 水の
月かなとあり

・ 下段 睡猫の位（沉足）

この心牡丹花下の睡猫心あり 舞蝶とあり

・ 同段 心明の位

あり

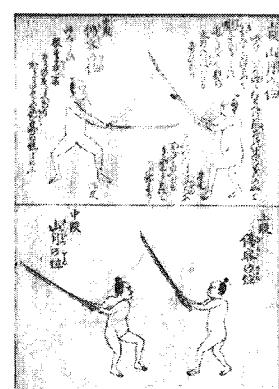


図3-1-6.『武術早學』の劍法の原文

・ 上段 山月の位 (浮足)

此ならひ身軽くたとへば風前の木の葉の如く
間をよくつもつて 敵に遠からず 近くあ
りて敵の太刀の及ばざる習ひありされば山
月眼前にありといへども手にしられずとい
ふ語あり

・ 中段 假客の位 (沉足)

此ならひ敵を表裏するのをしへあり かるが
ゆえに假客の位といふ

・ 上段 假客の位

・ 中段 山月の位

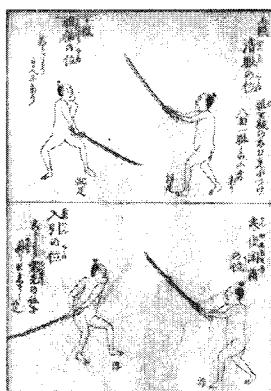


図 3-1-7. 『武術早學』の剣法の原文

・ 上段 清眼の位 (浮足)

め 眼を敵の太刀先につけ 八面一眼といふ習あ
り

・ 下段 睡猫の位 (沉足)

ことわり まへにあり

・ 寒夜聞霜の位 (浮)

・ 入引の位 (浮)

ことわり 電光の位に具に書しるし侯也

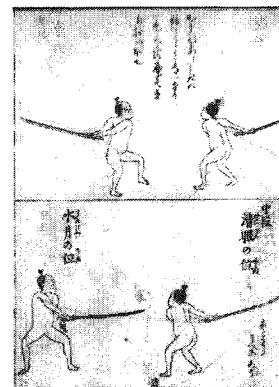


図 3-1-8. 『武術早學』の剣法の原文

かまへおなしひきハ位をとること専一なり
一毛火山のへだて有至極の所也

・ 中段 清眼の位 (浮)

ことわり まへにあり

・ 水月の位

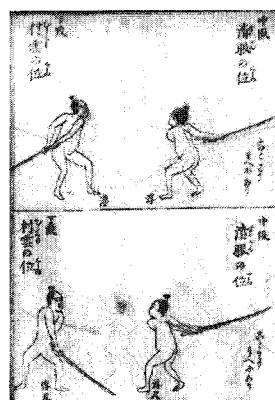


図 3-1-9. 『武術早學』の剣法の原文

・ 中段 清眼の位 (浮)

ことわり まへにあり

・ 下段 村雲の位 (浮)

・ 中段 清眼の位 (浮足)

ことわり まへにあり

- 下段 村雲の位 (浮足)

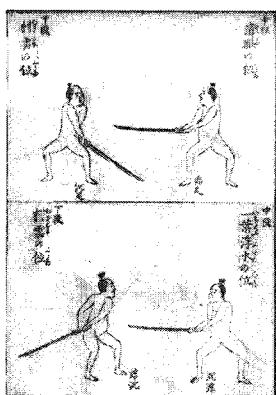


図 3-1-10.『武術早學』の剣法の原文

沉

- 浮船の位 (沉)
でんくわう くらゐ
- 電光の位 (沉)
でんくわう くらゐ

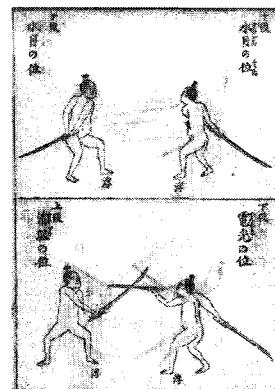


図 3-1-12.『武術早學』の剣法の原文

- 中段 清眼の位 (浮足)

- 下段 村雲の位 (沉足)

- 中段 一葉浮水の位 (沉浮)

- 下段 村雲の位 (浮沉)

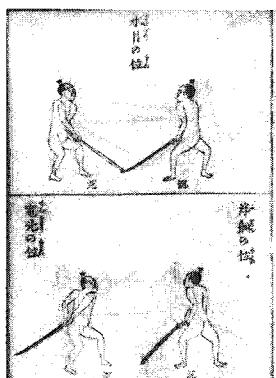


図 3-1-11.『武術早學』の剣法の原文

- 下段 水月の位 (浮)

- 下段 水月の位 (浮)

- 下段 電光の位 (浮)

- 上段 清眼の位 (浮)

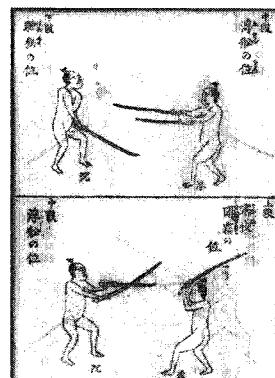


図 3-1-13.『武術早學』の剣法の原文

- 水月の位

沉

- 中段 浮船の位 (浮)

- 下段 睡猫の位 (沉)
- 上段 寒夜聞霜の位 (浮)
- 中段 浮船の位 (沉)

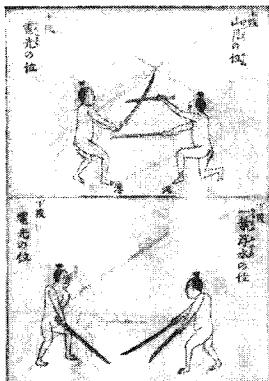


図 3-1-14. 『武術早學』の剣法の原文

- (浮)
- (浮)
- 上段 水月の位 (浮沉)
- 中段 寒夜聞霜の位 (沉)

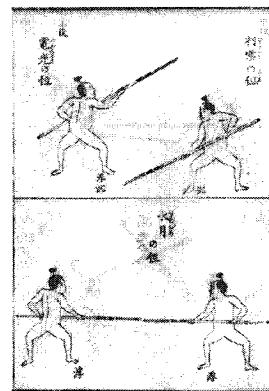


図 3-2-2. 『武術早學』の鎗法の原文

- 上段 山月の位 (沉)
- 中段 電光の位 (浮)
- 下段 一葉浮水の位
- 下段 電光の位

(2) 鎗法

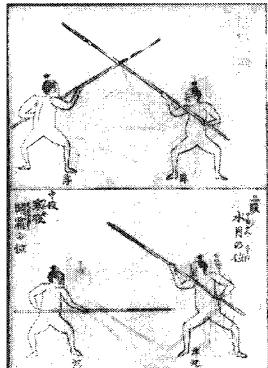


図 3-2-1. 『武術早學』の鎗法の原文

- 下段 村雲の位 (沉)
- 上段 電光の位 (浮沉)
- 水月の位
- (浮)
- (浮)

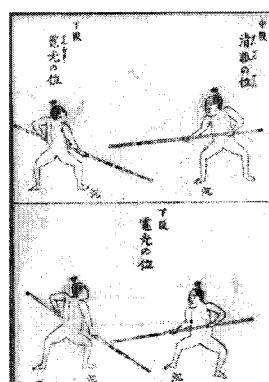


図 3-2-3. 『武術早學』の鎗法の原文

- 中段 清眼の位 (沉)

- 下段 電光の位（沉）

- 下段 電光の位

(沉)

(沉)

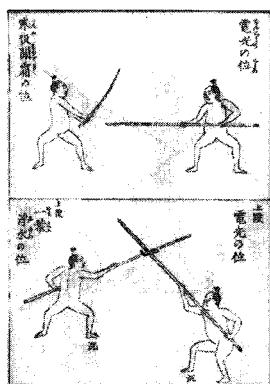


図3-2-4.『武術早學』の鎗法の原文

- 水月の位

爰に琴糸をきる 習ひあり

- 中段 電光の位

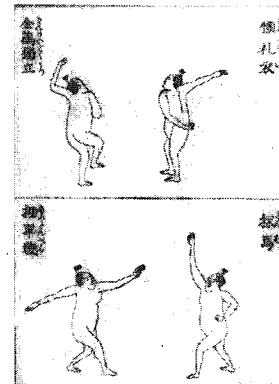
(4) 拳法

図3-4-1.『武術早學』の拳法の原文

- 電光の位

- 寒夜闇霜の位

- 上段 電光の位（沉）

- 上段 一葉浮水の位（沉）

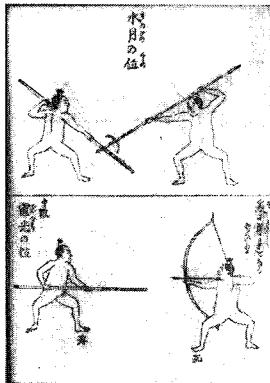
(3) 鎗法・弓法

図3-3.『武術早學』の鎗法・弓法の原文

- 懶札衣

- 金鶴獨立

- 探馬

- 拗单鞭

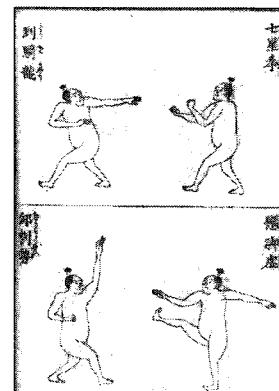


図3-4-2.『武術早學』の拳法の原文

しちせいけん
• 七星拳

たうきりやう
• 到騎龍

けんきやくきよ
• 懸脚虛

きうりうせい
• 邱劉勢



図 3-4-3. 『武術早學』の拳法の原文

かさうせい
• 下挿勢

まいふく
• 埋伏勢

ほうかし
• 抛架子

ちんちうせい
• 粘肘勢

いつせふほ
• 一霎步

きんきうせい
• 摘拿勢

ちうしほいせい
• 中四平勢

ふくこ
• 伏虎勢

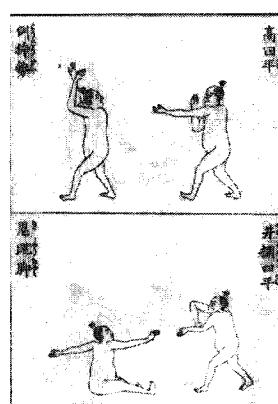


図 3-4-4. 『武術早學』の拳法の原文

かうしほい
• 高四平

とうさうせい
• 倒挿勢

せいらんしほい
• 井欄四平

- きしやうきやく
・鬼蹴脚



図3-4-6.『武術早學』の拳法の原文

- がんし
・鷹翅

- きこせい
・騎虎勢



図3-4-8.『武術早學』の拳法の原文

- じとうせい
・指當勢

- じとうせい
・獸頭勢

- しんけん
・神拳

- いちぢうべん
・一條鞭

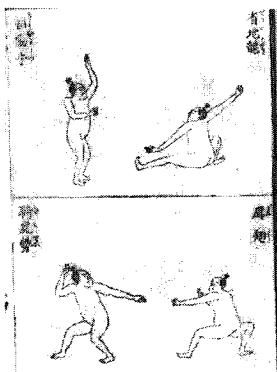


図3-4-7.『武術早學』の拳法の原文

- あぶらんちう
・拗鶯肘

- たうとうはうせい
・當頭砲勢

- じゅんらんちう
・順鶯肘

- きこ
・旗鼓勢

(5) 棍法

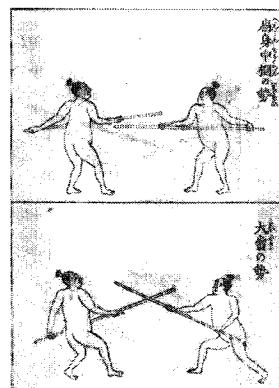


図3-5-1.『武術早學』の棍法の原文

- せうちりやう
・省地龍

- ちようやうしゅ
・朝陽手

• 扁身中欄の勢
へんしんちゅうらん いきおひ

• 大當の勢
たいとう

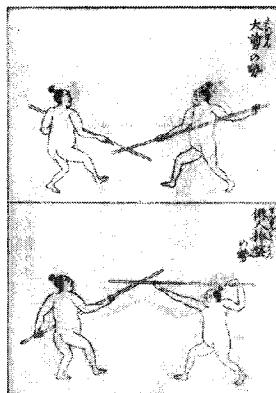


図 3-5-2. 『武術早學』の棍法の原文

• 大剪の勢
たいせん

• 僮人棒盤の勢
せんにんはんうはん

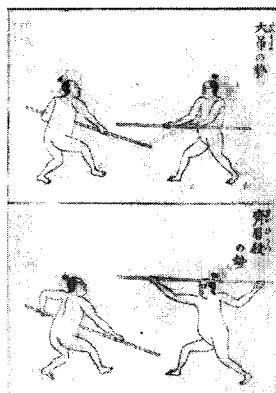


図 3-5-3. 『武術早學』の棍法の原文

• 大吊の勢
たいりよ

• 齊眉殺の勢
せいひきつ

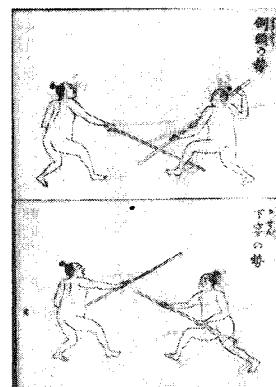


図 3-5-4. 『武術早學』の棍法の原文

• 倒頭の勢
たうとう

• 下穿の勢
かせん

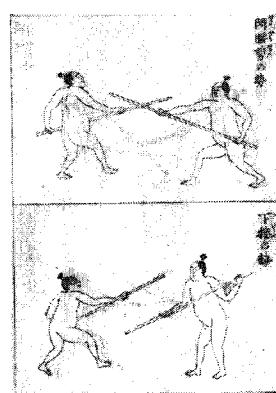


図 3-5-5. 『武術早學』の棍法の原文

• 閃腰剪の勢
せんやうせん

• 下接の勢
かせふ



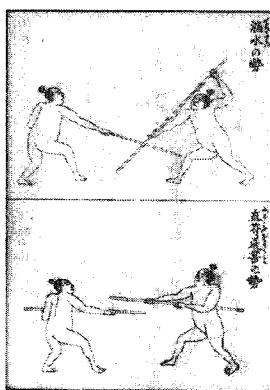


図3-5-6.『武術早學』の棍法の原文

- 滴水の勢
- 直符送書の勢

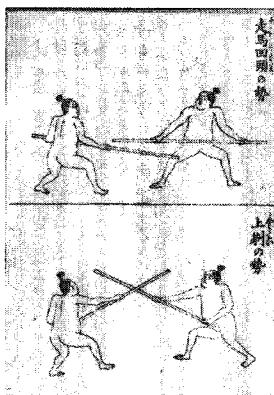


図3-5-7.『武術早學』の棍法の原文

- 走馬回頭の勢
- 上剣の勢

(6) 入身の事

「入身の事」の原文は以下の通りです。

図3-6.『武術早學』の「入身の事」の原文

・ 入身の事

世に入身といふハ太刀をもつて鎧をとめ、十文字かぎ鎧をもつてすやりの手もとに入事をいへり、今爰にあらわす事ハ敵のかまへをやぶる義なり、門をいるに三つのつもりあり、敵左ニたよりをとらば太刀上段にあり、右にたよりあらバ中段にかまへてつかんとするなり、前にたよりを取るには遠近のつもりをもつて入レベし是未然に敵をつもるのおしへなり

(7) 追かけ者仕留る事

「追かけ者仕留る事」の原文は以下の通りです。

図3-7.『武術早學』の「追かけ者仕留る事」の原文

・ 追かけ者仕留る事

追かけ者にハニツのおしへ有、追討の時ハ浮足
のならひをもつて下段をはらふべし、かならず
ちかくみてうちはづす事あり若又たちかへる時
ハ退て其勢ひをぬかすべし、爰に進退のかね有

口伝

(8) 居合の事



図 3-8. 『武術早學』の「居合の事」の原文

・ 居合の事

凡剣術にハニツの道あり、さやよりぬき出した
るを曲としぬかざる 時ハつもりをもつてする
これを名て居合といふ、
さらに座したるをのミいふにハあらず、
また無刀にて剣にむかふを捕手といふ、
此次に其術をしるすなり、居合には二の
ならいあり、長剣を帶する者にハちかく
よつて右のかたにならぶべし、短剣を帶

する者にハ退て左のかたによつてうつべ
し

(9) 捕手の事

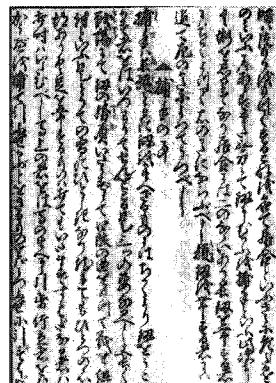
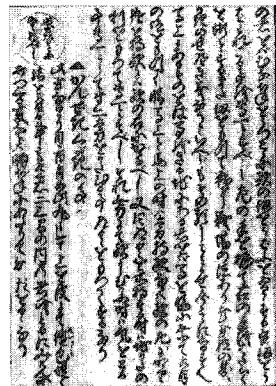


図 3-9. 『武術早學』の「捕手の事」の原文

・ 捕手の事

捕手ハ長短ともに剣をかまへざるものにはち
かくより剣をうごかす者をばいつわりてせんを
とる、是三つの要なるべし、又長く戦場にて剣
の勝負いたらば四肢の曲をもつて戦を組計
といふ、是とりての習にひとしきなり、然れど
もひとつ心得あり、具足を帶するものハ打て
もいたまず、すはだなる者ハ打時ハいたむべし、
馬士の者をは馬のまへに引歩行立者をハかうべ
を捕て引ふせ、かぶとをきるものをバウつふせ
に引き、すはだの者をバムナホネをうつ、こゝ
に敵の剣をうばふを習とする、吾剣をうばわれ

さる事を専一とすべし、左の手を握て右の手をはたらくを術とする、また剣をもつて戦に戦場の法あり、尤至極の圖ニかきのせべき義なりといへども、その類にことよせ今こゝにしるす也馬上にあるものをば馬をきる、地にある者をバ馬を幅に乗て水月の位をもつて勝、馬上と馬上の時ハ太刀持敵ならハ敵の左リにかゝり鎧を持、敵にハ敵の右にかゝるべし、又同道具を所持する時ハ地かたの利をもつて専一とすべし、それ無刀にて敵にむかふ時ハ氣をとる事専一として専ニ太刀をかたむる事道理をもつてするなり

(10) がんぜきくだきの事

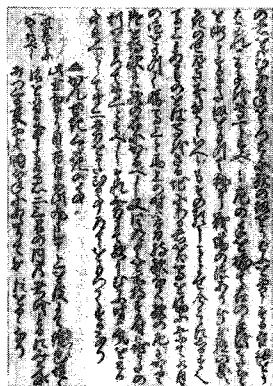


図3-10.『武術早學』の「がんぜきくだきの事」の原文

・がんぜきくだきの事

此玉たもとに入持べし。此玉なまり目百目如
此丸くして、上を皮にて縫包^{ぬいつけむ}短く緒を付する事
も有、右二三間の内の者をとるにみけんに打つ
くる、夏などハ胸ぼねにあたりて則チたをるゝ
なり

(11) 早縄の事

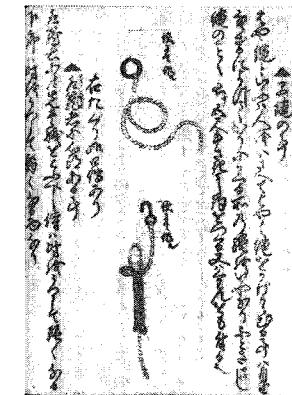


図3-11.『武術早學』の「早縄の事」の原文

・早縄の事

はや縄といふハ人をおさへてはやく縄をかけからむる事ハ自由ならざるによつてかりにかくる所の縄をいふなり、ふときさし縄のごとく長サ五尺斗さきに鉤をつくる、又ハくわんをも付る也 鉄にて作ル 鉄にて作ル 右たぐり様口伝あり

(12) 取籠者に心得ある事



図3-12.『武術早學』の「取籠者に心得ある事」の原文

・とりこもる ・取籠者に心得ある事

取籠者あらバ先貴賤をとふべし、侍ハ時をうつして強くなる、下郎ハ時をうつして弱くなる物

なり

(13) 劍しゆつ虚実の事

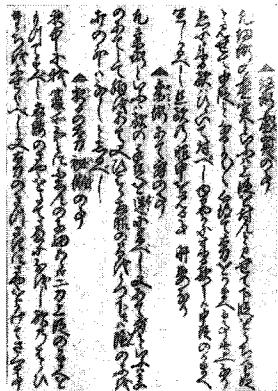


図 3-13. 『武術早學』の「剣しゆつ虚実の事」の原文

・ 剣術虚実の事

凡剣術の虚実といふハ上段を付んと見せて下段をうち、下段と見せて中段となる、
よくV心得て太刀をかまへる事専一なり、
急に来る敵ハひらいて付べし、ゆるやかに敵に
ハ中段のかまへ宜しかるべし、且敵の眼中を見る事肝要なり

(14) 柔術あて身の事



図 3-14. 『武術早學』の「柔術あて身の事」の原文

・ 柔術あて身の事

凡柔術といふハ敵の手足を逆にとるべし、又

あて身といふハ真のあてとて胸をあて、又ひは
ら両眼の間をうつ、下モハ陰のふを打の外ハな
しと志るべし

(15) 夜るの太刀秘術の事



図 3-15. 『武術早學』の「夜るの太刀秘術の事」の原
文

・ よるの太刀秘術の事

夜中に我寝所などにふしんの子細あらバ二刀上
段のかまへをもつすべし、両腰のさやをたて
さまになをし敵のはらひたちをふせぐべし、又
太刀のきつさきにさやをかけてさくる事あり是
ハ太刀をながくするのこゝろなり

(16) 眼つぶしの事

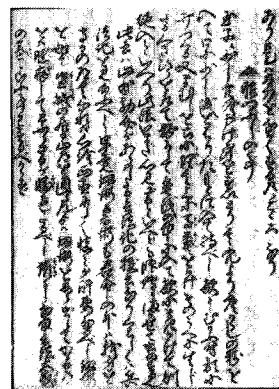


図 3-16. 『武術早學』の「眼つぶしの事」の原文

・ 眼つぶしの事

玉子ニ少し穴をあけ身をすいとり、其穴より唐からしの粉を入れ口に少し紙をはり、たもとに入て待べし、敵にむかふ時顔に打つくる、又まむしを土に埋其上に馬糞をかけそのうへに生じたる、くさびらを取て粉にして鼻紙の中に入て敵にまきかけて則絶入といへり、此法いまだ心みざるといへども師伝ニまかせて書のする也此書ハ山本勘介があらハしたる兵法記の抜書なり、くわしくハ兵法記を見給ふべし、畢竟劍術柔術も君命の外ハ我身を守るの道具なれば心を正直にして慎ミが肝要なるべし、劍術を知て盜賊の居る山道を通らんよりハ劍術をしらずしてかゝる道をハ臆病してとふらざるが勝れたるべし、諺になま兵法大疵の基といふ事わするべからず

4) 「軍法兵法記奥義卷」

・ 軍法兵法記 奥義卷

(1) 敵二人我一人仕合の事

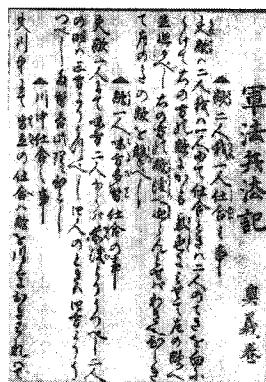


図4-1.『武術早學』の「敵二人我一人仕合の事」の原文

らんとせバわきへひらきて左のかたの敵を擊うつ
べし

(2) 敵一人味方多勢仕合の事

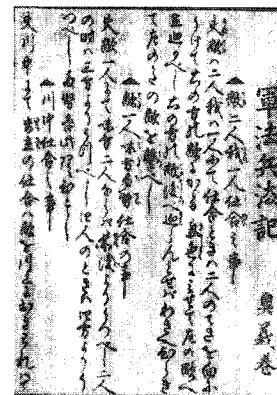


図4-2.『武術早學』の「敵一人味方多勢仕合の事」の原文

・ 敵一人味方多勢仕合の事

夫敵一人にて味方二人ならば前後よりうつべし、二人の時ハ三方よりうつべし、四人のときハ四方よりうつべし、多勢各此理ニひとし

(3) 川中仕合の事



・ 敵二人我一人仕合の事

夫敵ハ二人我ハ一人にて仕合ときハ、二人のてきを向にうけて右の方の敵にかゝる氣色にミきしよくてきうしろまわせて左の敵へ立廻るべし、右の方の敵後へ廻

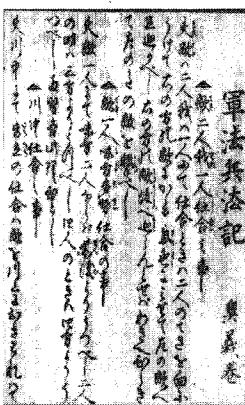


図 4-3. 『武術早學』の「川中仕合の事」の原文

・ 川中仕合の事

かちたつ
夫川中にて歩立の仕合ハ敵を川上におき、われ
ハてきの右方下すしかひに立向べし、其理ハ第
一に水上ニむかへ陽性をうくる理、
第二に川上より流来るぞう物の難をうけざる
理あるを以なり

(4) 家内仕合の事

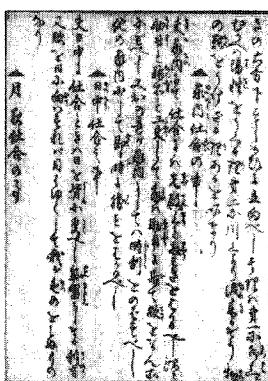


図 4-4. 『武術早學』の「家内仕合の事」の原文

いえのしあい
・ 家内仕合の事
そのかない
夫家内にて仕合には先殿上と両わきをはかる
べし。次ニ助用と難所と工夫して我ハ助用に
居て敵をなん所に置べし、又おのれが家内に
してハ時刻をのばすべし。他の家内にして即時
に勝ことをはかるべし。

(5) 日中仕合の事

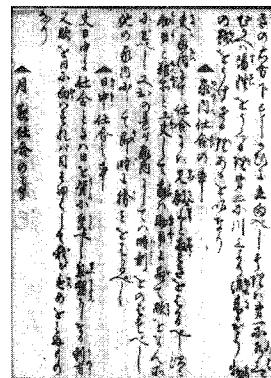


図 4-5. 『武術早學』の「日中仕合の事」の原文

・ 日中仕合の事

うしろ うく せいきさかん
夫日中に仕合ときハ日を背に受べし、氣盛
りあり。又敵を日に向ハすれば目はゆくし
て、我が色めをミぬものなり

(6) 月夜仕合の事





図4-6.『武術早學』の「月夜仕合の事」の原文

・月夜仕合の事

われ かげ い てき
夫月夜に仕合ときハ我ハ陰の方に居て敵を月
に向ハすべし、をのれかくれて敵をあらはし見
るの利なり

(7) 間夜仕合の事

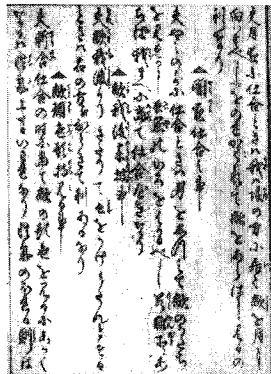


図4-7.『武術早學』の「間夜仕合の事」の原文

・やみの上
・間夜仕合の事

夫やみの上に仕合ときハ身をしつみて敵のかた
ちを見すかし、^{へいき}兵器のいろをはかるべし、
もしなんじよ
若難所ニあらば我まへに當て仕合べきなり

(8) 敵我後來披事



図4-8.『武術早學』の「敵我後來披事」の原文

てきわがうしろよりきたらひらく
・敵我後來披事

それてきわがうしろ
夫敵我後よりきたりて、言をかけうたんとす
るときハ右の方へひらきて利あるなり

(9) 敵顔色顔持見る事

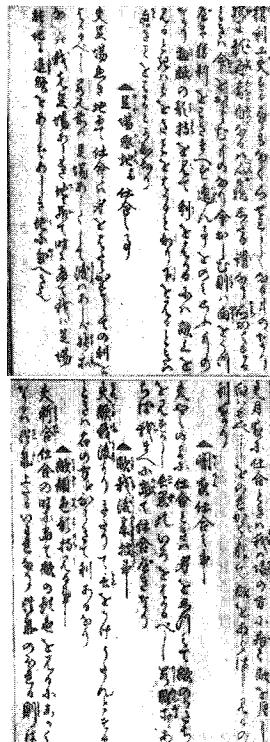


図4-9.『武術早學』の「敵顔色顔持見る事」の原文

• 敵顔色顔持見る事

夫斬合仕合の時に當て敵の顔色を見るに、あかくなるハ性氣上たるいわれなり、性氣のほれる則は勝利工夫する事もなく心せわしくなるものなり、次に顔色青白なるハ心臆したる謂なり、心おくするときハ命をおしむものなり、命おしむ則ハ向をうつべき、勝利をわきまへず道ん事をのミ思ふものなり、拙敵の顔持を見て利をはかるにハ敵上を見るときハとをきことをはかると知り、下を見るとときハ近きことをはかると可知なり

(10) 足場悪地ニ而仕合の事

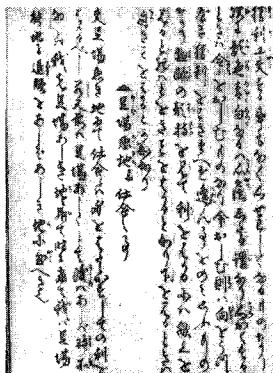


図 4-10. 『武術早學』の「足場悪地ニ而仕合の事」の原文

• 足場悪地ニ而仕合の事

夫足場悪き地にて仕合ニハ身をはたらかすしての利をはかるべし、若又前ハ足場あしくして後ハあしづ能所ならば、我先足場あしき地に居て時に當て我ハ足場能地に退、敵をあしばあしき地に置へき也 十三之終り

ニ 宝暦七年九月開板トアリ

(11) 刊行年度付箋



図 4-11. 卷末の刊行年度付箋

• 完校宝暦 7 年

『武術早學』には「序文」には【図 1】のように著者「山本勘助」と「天文 15 年」(1546)が記されており、卷末には「完校宝暦 7 年」(1757)と記されている。卷末の刊行年度は、『武術早學』の完校後の付箋と見られる。

まとめ

以上のように、『武術早學』は江戸時代の 1757 年に刊行された山本勘助名の総合武芸書であるが、山本勘助の生没年からすると、後年その名を借りた偽書の可能性が高い。江戸時代にはこのような例がしばしば見られるが、本書の歴史的価値はそのところからも検討されねばならない。

『武術早學』の構成は「序文」「目録」「軍法兵法記剣術之巻」「軍法兵法記奥義巻」の 4 巻 1 冊から成っている。まず、それらの内容や特色を簡単にまとめる。

1. 『武術早學』の内容は「拳法」と「棍法」を除けば、山本勘助『軍法兵法記』(天文 15、1546)とほぼ同じである。逆に言えば、『軍法兵法記』に「拳法」と「棍法」を書き加えたものである。なお『武術早學』が刊行された 1757 年以前に、中国版『紀効新書』(1560、1562、1

584) と『武備誌』(1621) は既に編纂・刊行されており、長澤規矩也による和刻版『武備誌』(1667) も刊行済みであるが、平山行藏による和刻版『紀効新書』(1798) は未刊行であった。したがって、「拳法」と「棍法」は中国版『紀効新書』、『武備誌』ないし、和刻版『武備誌』から参照されたのではないかと見られる。

2. 「目録」には「軍法兵法記劍術之卷」と「軍法兵法記奥義卷」の項目が 27 挙げられているが、本論中には、「両刀を遣ふ利かた」「鎗刀戦ひ構ひのりかた」「弓鎗戦ひの圖式」が除かれた 24 項目が記されている。これは目録の「両刀を遣ふ利かた」「鎗刀戦ひ構ひのりかた」「弓鎗戦ひの圖式」が、「軍法兵法記劍術之卷」中の「劍法・鎗法・弓法・拳法・棍法の動作」として一つの項目でまとめられているからであった。

3. 「軍法兵法記劍術之卷」の内容は、「劍術三ツの要といふ事」「上段下段構の事」「劍法・鎗法・弓法・拳法・棍法の動作」「入身の事」「追かけ者仕留る事」「居合の事」「捕手の事」「がんぜきくだきの事」「早縄の事」「取籠者に心得ある事」「劍しゆつ虚実の事」「柔術あて身の事」「夜るの太刀秘術の事」「眼つぶしの事」から成る。

4. 『武術早學』の拳法と棍法の項目には中国武芸の『紀効新書』と『武備誌』の内容がそのまま表れている。つまり、16世紀以降『紀効新書』、『武備誌』等の中国の兵法や武芸が日本にも影響を及ぼしているのである。これまで中国武芸が朝鮮半島に大きな影響を与えたことは『武芸図譜通誌』(1790) 等から指摘されていたが、日本の文献にも影響を与えていたことが明らかである。このような『武術早學』は、日本武芸史や日・中武芸交流に関する研究上、さらには江戸期出版史を考える上でも貴重な資料である。

参考文献

- 1) 戚繼光,『紀効新書』台湾国家図書館所蔵, 1562.
- 2) 戚繼光,『紀効新書』台湾国家図書館所蔵, 1584.
- 3) 茅元儀,『武備志』, 台湾国家図書館, 日本国立公文書館所蔵, 1621.
- 4) 長澤規矩也,『武備志』, 国立公文書館(内閣文庫)所蔵, 1667.
- 5) 山本勘助,『兵法秘傳書』, 日本国会図書館, 東京国立博物館, 筑波大学図書館所蔵, 1701.
- 6) 山本勘助,『武術早學』日本財團法人無窮會所蔵, 1757.
- 7) 正祖,『武芸図譜通誌』韓国の奎章閣所蔵, 1790.
- 8) 平山行藏,『紀効新書』, 国会図書館所蔵, 1798.
- 9) 綿谷雪,『新・日本剣豪100選』, 秋田書店, 1990, pp. 43-46
- 10) 中国兵書集成編委会編,『武備志』『中国兵書集成第27冊』, 解放軍出版社, 1998, pp. 1-6.
- 11) 朴貴順, 16世紀以降における中・日・韓武芸交流に関する研究-『紀効新書』、『兵法秘傳書』、『武術早學』、『武芸図譜通誌』を中心に-, 金沢大学人間社会環境研究科博士論文, 2006.
- 12) 朴貴順,『武術早學』の内容と中国武芸の影響,『体育史研究』24, 2007, pp. 65-73.

付記

本稿は、朴貴順「16世紀以降における中・日・韓武芸交流に関する研究-『紀効新書』、『兵法秘傳書』、『武術早學』、『武芸図譜通誌』を中心に-」、金沢大学人間社会環境研究科博士論文（2006年）から『武術早學』の部分を取り出し、まとめ直したものである。解説や全体の調整には大久保が関わったが、これは指導教員としての責務の中に含まれる。投稿規定上大久保の氏名を入れてあるが、本稿にかかる業績は朴貴順に属するものであることを明記しておきたい。